

# 連載特集 - 衛星余話 (11) -



遠山 嘉一

富士通株式会社 宇宙開発推進室  
本誌編集委員

## 「海外向け日本の衛星放送」

日本人が衛星通信を強烈に印象付けられたのは昭和38年11月23日のリレー衛星によるケネディ暗殺のニュースであった。その翌年、東京オリンピックにはシンコム衛星による映像中継が行われ、衛星通信の威力が存分に示された。この実現のためには、郵政省通信総合研究所・鹿島宇宙センターの方々の絶大な努力があったと言うことを後の25周年記念公開の折に知ったのだ。

その後、国際通信の大部分をインテルサットなどの通信衛星が担うようになった。しかし、光ファイバー通信の発展により、

T P C -3 に始まる光海底ファイバー通信網が構成され、情報通信網は光にウエートが移行した。一方衛星を使った放送は、NHKのBS放送をはじめ、WOWOW やスカイパーフェクTV が定着してきている。我々が外国に住んだり、旅行をした時、しばらく前までは日本の情報入手は何日か遅れで配られる新聞が唯一の手段であった。ところが最近では衛星のお陰で、国によってはほぼ同日に衛星版の新聞が入手できるようになったし、衛星を経由して同時に日本の放送を受信することが出来るようになった。

たまたま家族がトルコに赴任をしていたので、出かけて行ったときアンカラで日本からの衛星放送NHKワールドTVをよく見る機会があった。1996年当時はアナログ放送であったが、一年ほどしてデジタル化された。この地域では建物の屋上に直径約3mのパラボラを置き、パナムサット4を経由して受信する。日本との時差は冬期が7時間、夏期は6時間であるので、真夜中寝る前に朝7時のNHKニュースが見られ、明け方にはお昼のニュースと連続ドラマを見ることが出来た。即時に日本の放送が視聴できるのは、異国にいても孤独感をまったく感じることがないすばらしいことであった。

このテレビを見ていると、スポーツ番組や外国のニュースでは時折真っ黒な画面が出て、「放送権の都合によりご覧いただけません」とのテロップが流れることがあった。日本国内では放映できて

も、世界に送り出すことは出来ない映像があるのだろう。特に長野オリンピックの際には、すべての映像を放映することが出来なかった。このため海外向けのニュース番組を一时间遅れにした上、オリンピックの競技結果は静止画で構成しなおして放送した。番組制作者はずいぶん苦勞をしたのではなかったか。今でも、イチローの見事なファインプレーはNHKワールドTVでは見られまい。技術的に出来るだけではない、いろいろな制約が存在することを痛感しながらTVに見入ったものだった。